

食肉販売動向調査結果 (2020年度上半期)

2020年6月
独立行政法人農畜産業振興機構

- ※1 調査結果は当機構の見解ではなく、当機構が定期的に調査を実施している主要な食肉の卸売業者および小売業者（全ての業者ではない）を対象としたアンケート調査の回答をとりまとめたものである。
- ※2 2020年2月に本調査を行ったため、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による見通しが不明確であったことから、2019年度下半期の実績のみの公表とした。

【ポイント】（2020年2月現在）

1 2019年度下半期における食肉の取扱割合の実績

○小売業者における取扱割合の実績は、量販店は、牛肉および豚肉の取扱割合が減少した一方、鶏肉が増加した。食肉専門店は、牛肉の取扱割合が減少し、豚肉は同水準となった一方、鶏肉が増加した。

2 2019年度下半期における和牛の等級別取扱割合の実績

○小売業者における和牛の取扱割合の実績は、量販店では、4等級が約5割、3等級が約3割。食肉専門店では、5等級が約5割、4等級が約4割となった。

I 卸売業者

- 1 仕向け先別販売割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1頁
- 2 和牛の等級別取扱割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2頁
- 3 国産豚肉の種類別取扱割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3～4頁

II 小売業者（食肉専門店・量販店）

- 1 最近の食肉の取扱割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5頁
- 2 食肉の小売価格・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6頁
- 3 食肉の販売拡大に向けた対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7～8頁
- 4 和牛の等級別取扱割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9頁
- 5 国産豚肉の種類別取扱割合・販売価格帯・・・・・・・・・・ 10～11頁
- 6 輸入食肉の取扱割合・取扱状況・・・・・・・・・・・・・・・・ 12頁

調査概要

当機構では、食肉の消費・販売動向を把握するため、年に2回、卸売業者や小売業者（量販店および食肉専門店）の協力を得て、食肉の取扱い等に関するアンケート調査を実施している。

今回は、2019年度下半期（2019年10月～2020年3月）の実績等について調査を行った（2020年2月時点）。概要は以下の通りである。

調査対象先と回収率

(単位：社)

(参考) 調査対象者と回収数

1. 調査方法

アンケート調査

2. 調査対象者と回収率

右表の通り

3. 調査期間

2020年1月31日～2月21日

| | 調査対象先と回収率 | | |
|-------|-----------|------|--------------------|
| | 調査先対象数① | 回収数② | 回収率 (%) ③ = ②/① |
| 卸売業者 | | | |
| 牛肉 | 14 | 14 | 100 |
| 豚肉 | 13 | 13 | 100 |
| 小売業者 | | | |
| 量販店 | 19 | 19 | 100 |
| 食肉専門店 | 63 | 63 | 100 |

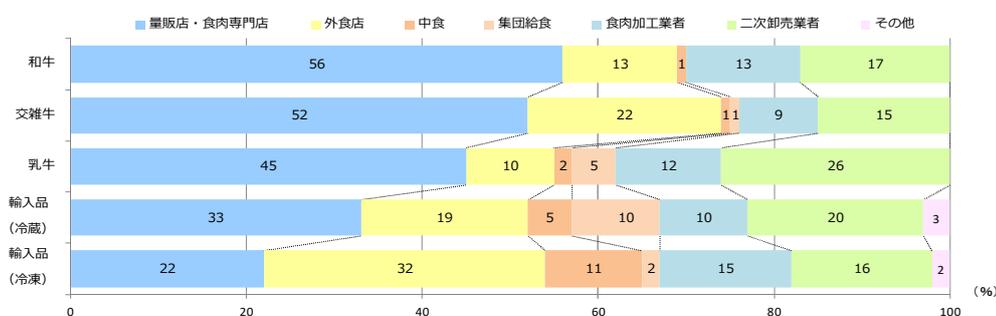
注：調査対象先は、食肉の市況（仲間相場）や小売価格について、当機構が定期的に調査を実施している主要な食肉の卸売業者および小売業者であり、全ての業者ではない。

牛肉

～比較的安価な国産品が小売に仕向けられる～

- 2019年度下半期の卸売業者における牛肉の仕向け先別販売割合の実績（重量ベース、以下同じ。）を見ると、和牛は「量販店・食肉専門店」が最も多かった。量販店の等級別取扱割合（9ページ）によると、3等級および4等級で約8割を占めることから、和牛の中でも比較的安価なものの大部分が量販店に仕向けられており、外食店へは5等級を中心に仕向けられているとみられる。
- 交雑牛および乳牛についても「量販店・食肉専門店」が最も多い結果となった。
- 輸入品（冷蔵）は「量販店・食肉専門店」が最も多かった一方で、輸入品（冷凍）は「外食店」が最も多かったことから、輸入品（冷凍）は業務向けの利用が中心となっているとみられる。
- 牛肉の家計消費がおよそ3割であること、生産量、輸入量に対する仕向け先別販売割合を勘案すると、「食肉加工業者」「二次卸業者」に販売された牛肉の大部分は、最終的に外食店等に仕向けられるとみられる。

2019年度下半期の仕向け先別販売割合（牛肉）



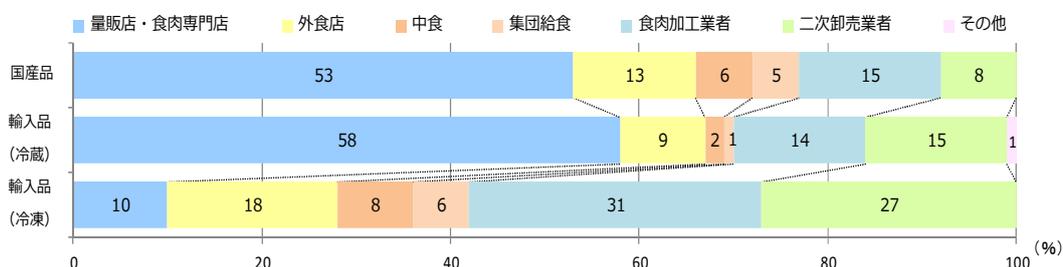
注：データは、各者の仕向け先別販売割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

豚肉

～国産品、輸入品（冷蔵）はテーブルミートとしての需要が高い～

- 2019年度下半期の卸売業者における豚肉の仕向け先別販売割合の実績を見ると、国産品は「量販店・食肉専門店」が最も多かった。
- 輸入品（冷蔵）は「量販店・食肉専門店」が最も多かった一方で、輸入品（冷凍）は「量販店・食肉専門店」が少なかった。
- 豚肉の家計消費がおよそ5割であること、生産量、輸入量に対する仕向け先別販売割合を勘案すると、「食肉加工業者」「二次卸業者」に販売された豚肉の約8割は加工品や外食店といった業務向けに利用されているとみられる。
- 特に、輸入品（冷凍）は「外食店」および「食肉加工業者」の計が約5割を占めていることから、業務向けの利用が中心となっているとみられる。
- 一方、国産品、輸入品（冷蔵）は、5割以上が「量販店・食肉専門店」向けとなっていることから、テーブルミートとしての需要が高いことがうかがえる。

2019年度下半期の仕向け先別販売割合（豚肉）

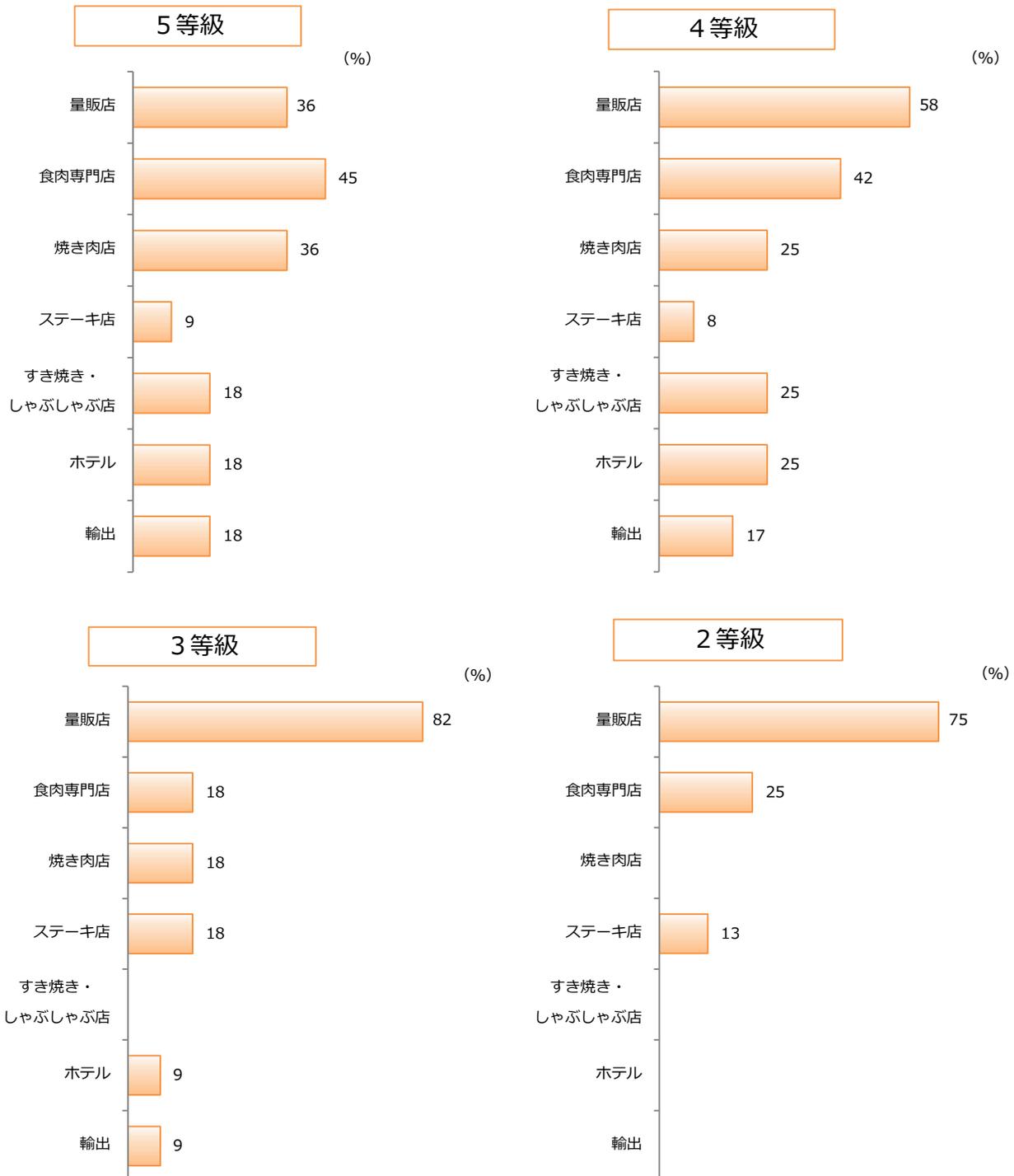


注：データは、各者の仕向け先別販売割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

和牛の等級別の主な販売先 ～ 和牛の5等級は「食肉専門店」、2～4等級は「量販店」～

- 卸売業者における和牛の等級別の主な販売先（件数ベース）については、**5等級は「食肉専門店」が最も多く**、次いで、「量販店」および「焼き肉店」となった。
- 4等級、3等級および2等級は「量販店」が最も多かった。**
- なお、食肉専門店は小口の販売先となるため、件数は多いものの、重量ベースで見ると少量であるとみられる。

和牛の等級別にみた主な販売先（卸売業者）



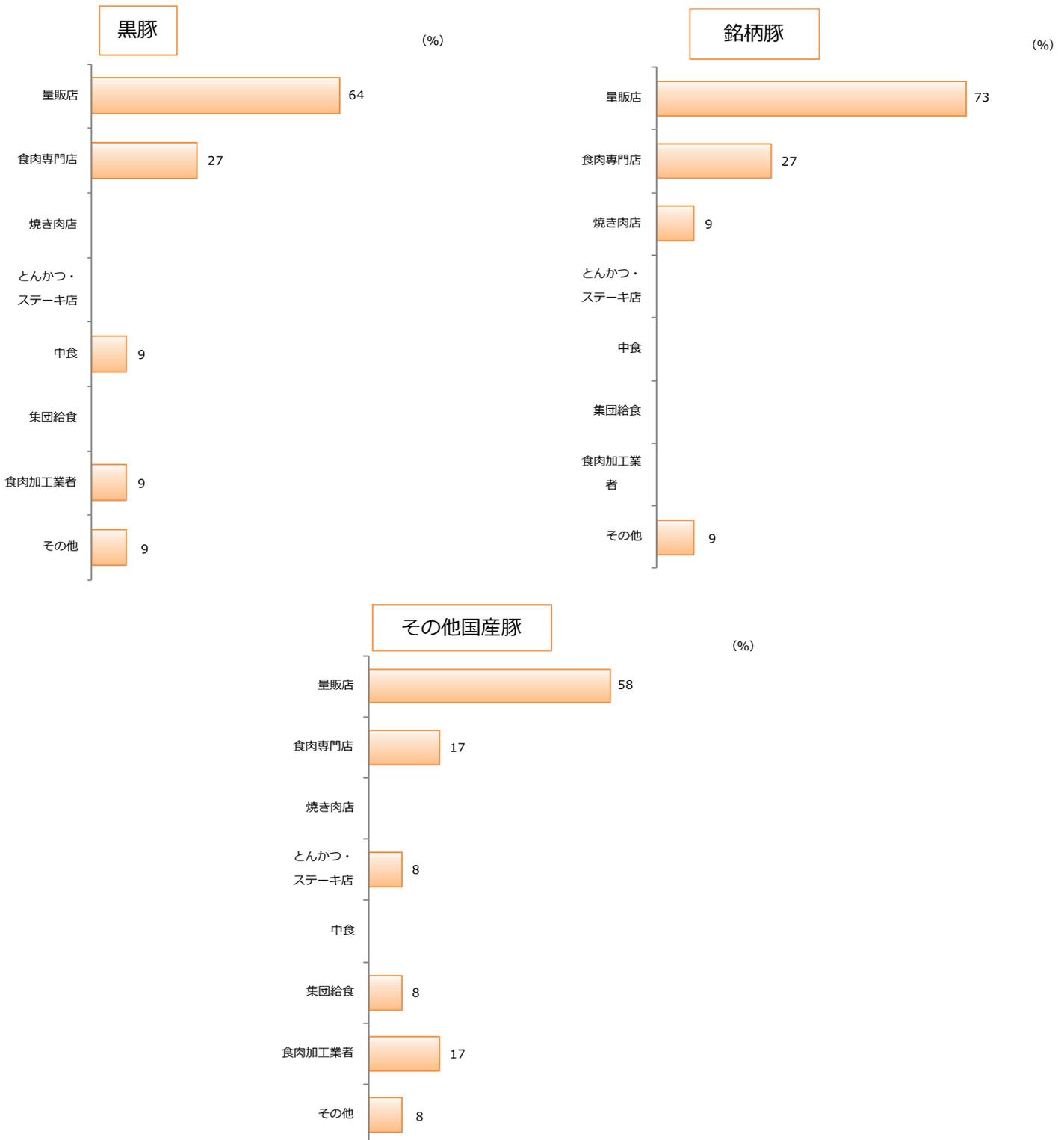
注：複数回答。

国産豚肉の種類別の主な販売先

～ 量販店における販売が中心～

○卸売業者における国産豚肉の種類別の主な販売先（件数ベース）については、**黒豚、銘柄豚およびその他国産豚は「量販店」が最も多く**、次いで、「食肉専門店」となった。
 ○その他国産豚の販売先は幅広いことが分かる。また、黒豚は中食や食肉加工業者への販売があることから、差別化を図った加工品向けにも販売されているとみられる。
 注：「その他国産豚」は、黒豚、銘柄豚以外の国産豚。「銘柄豚」には黒豚を含まない。

国産豚肉の種類別の主な販売先（卸売業者）



注：複数回答。

国産豚肉の種類別仕入価格帯 ~その他国産豚は588~825円、銘柄豚は662~915円、黒豚は995~1,149円 ~

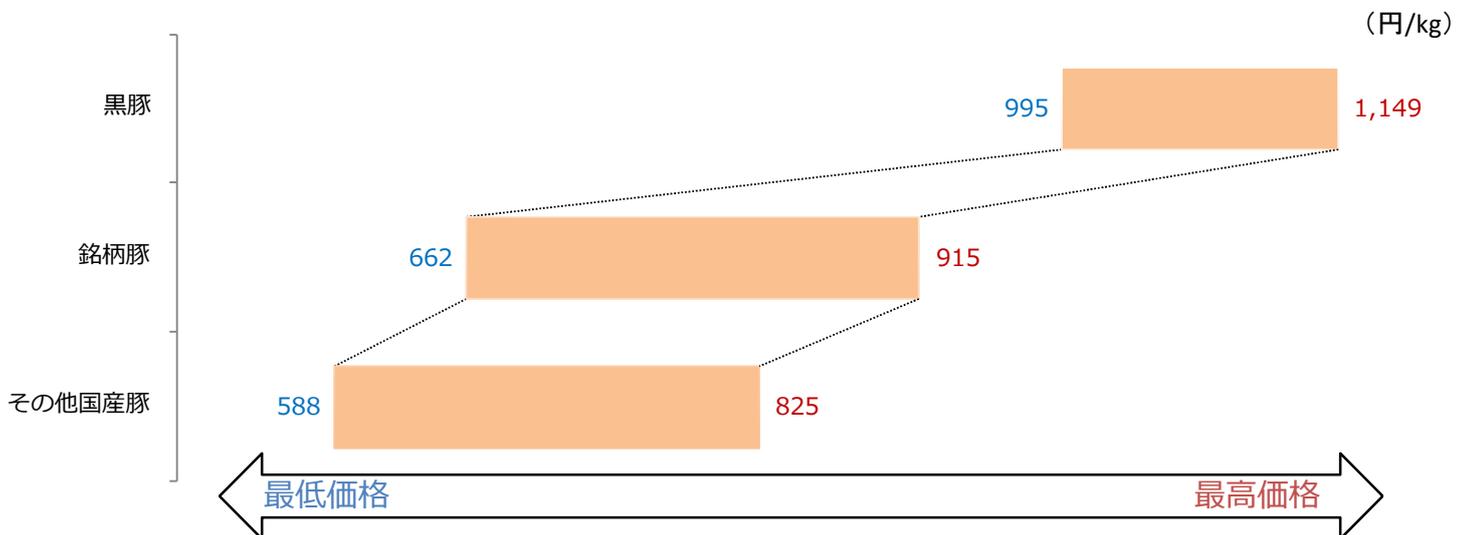
○2019年度下半期の仕入価格帯（1kg当たり）については、**黒豚は995~1,149円、銘柄豚は662~915円、その他国産豚は588~825円、となっている。**

○種類別の価格傾向として、銘柄豚はその他国産豚よりも1割程度高い価格帯となっており、黒豚はその他国産豚よりも5割程度高い価格帯となっている。

注1：販売価格帯の下値は最低価格、上値は最高価格。各者の平均価格（算術平均）である。なお、集計対象には、枝肉および部分肉を含む。

注2：「その他国産豚」は、黒豚、銘柄豚以外の国産豚。「銘柄豚」には黒豚を含まない。

国産豚肉の種類別仕入価格帯（卸売業者）



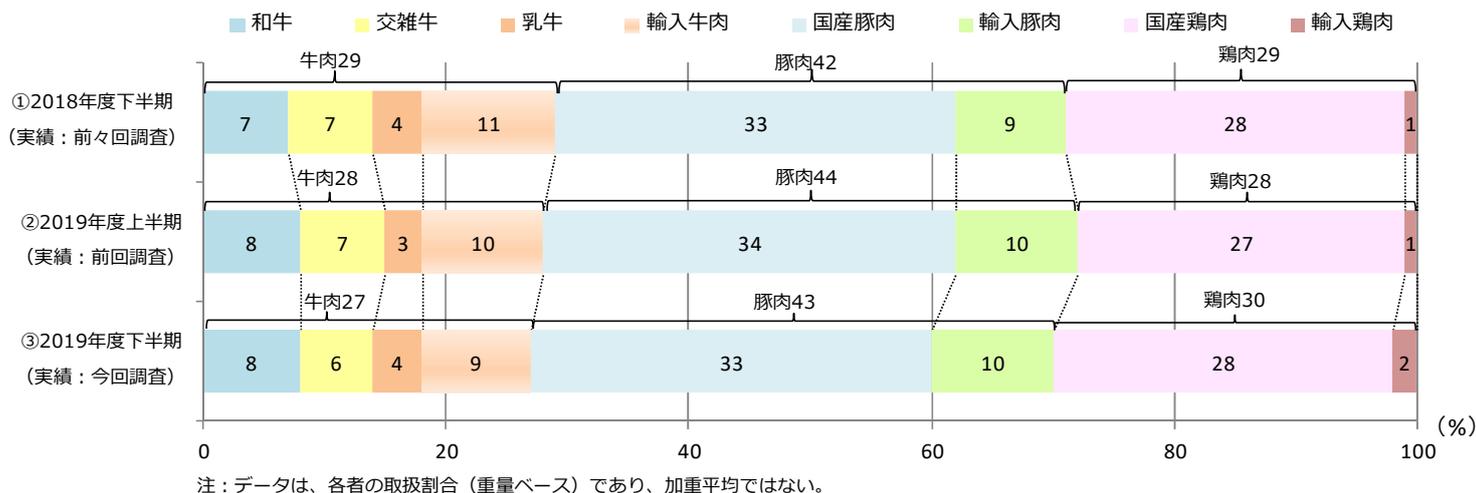
量販店

～牛肉が減少した一方、豚肉と鶏肉が増加～

○2019年度下半期の量販店における食肉取扱割合の実績（重量ベース。以下同じ。）は、**牛肉が27%、豚肉が43%、鶏肉が30%**となった。

○前年同期（2018年度下半期実績）と比較すると、牛肉が2ポイント減少した一方、豚肉および鶏肉が1ポイントそれぞれ増加した。

最近の食肉取扱割合（量販店）



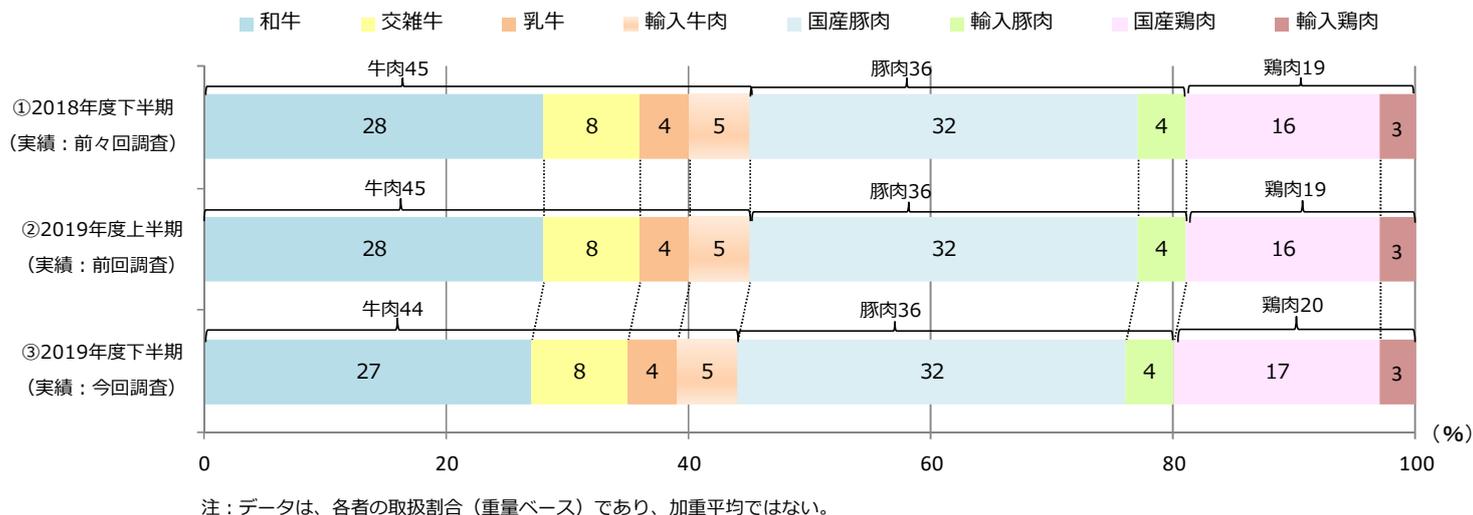
食肉専門店

～牛肉が減少した一方、鶏肉が増加～

○2019年度下半期の食肉専門店における食肉取扱割合の実績は、**牛肉が44%、豚肉が36%、鶏肉が20%**となった。食肉専門店は、量販店と比べて和牛の取扱割合が高く、輸入食肉の取扱割合が低いことが特徴である。

○前年同期（2018年度下半期実績）と比較すると、牛肉が1ポイント減少した一方、鶏肉が1ポイント増加した。

最近の食肉取扱割合（食肉専門店）



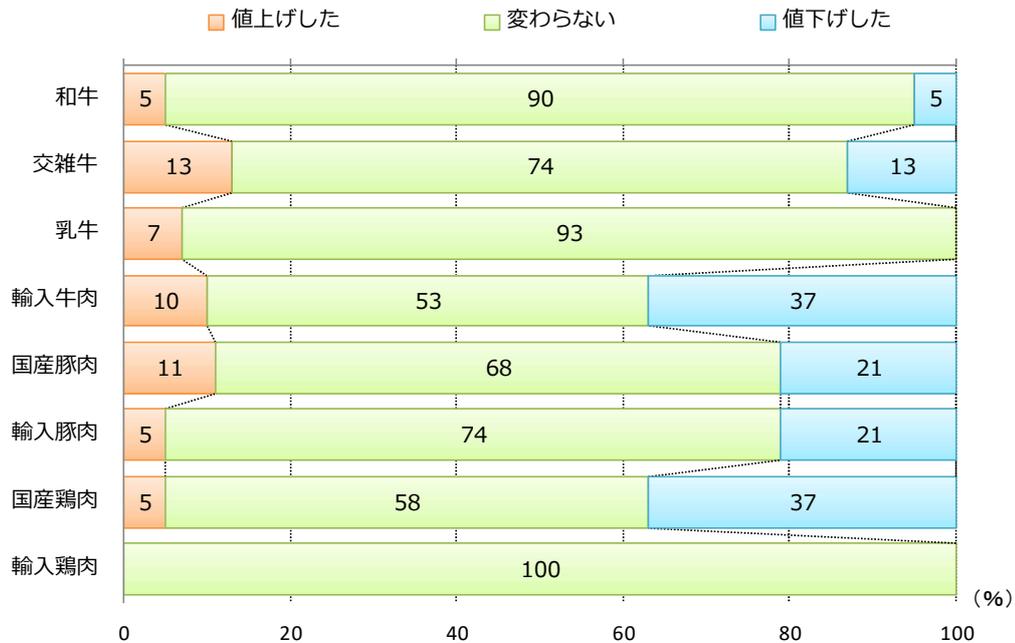
Ⅱ-2 食肉の小売価格（小売業者）

量販店

～交雑牛・乳牛・輸入鶏肉を除き値下げ傾向に～

○2019年度下半期の量販店における小売価格の実績（前年同期比）については、**全ての食肉で「変わらない」が最も多い中、輸入牛肉、国産豚肉、輸入豚肉および国産鶏肉では「値下げした」が「値上げした」を上回った。**

2019年度下半期の小売価格（実績）

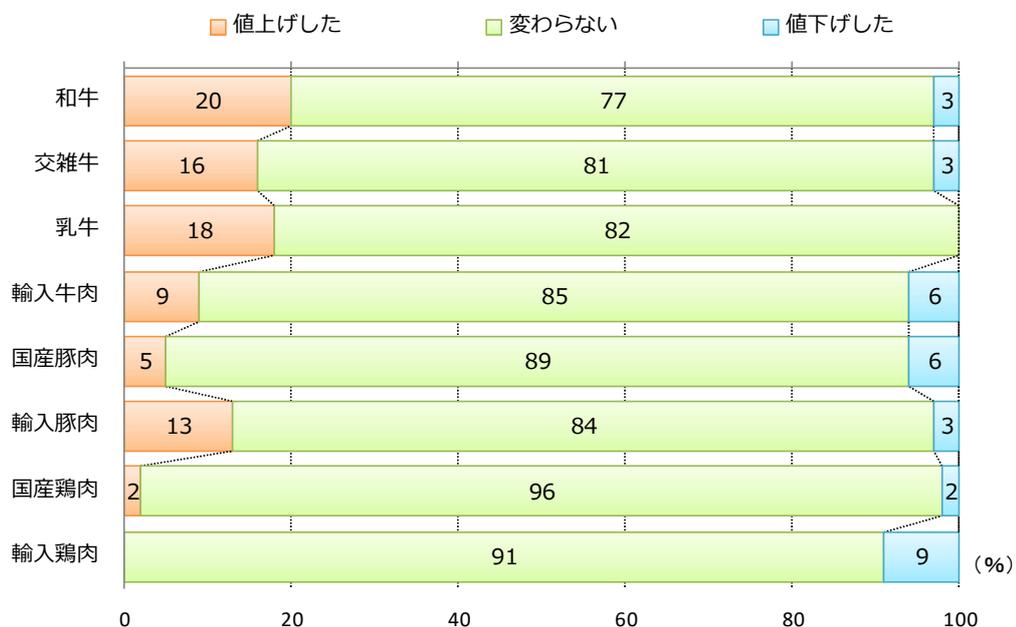


食肉専門店

～牛肉が値上げ傾向に～

○2019年度下半期の食肉専門店における小売価格の実績（前年同期比）については、**全ての食肉で「変わらない」が最も多い中、国産豚肉、国産鶏肉および輸入鶏肉以外の食肉は「値上げした」が「値下げした」を上回った。**

2019年度下半期の小売価格（実績）

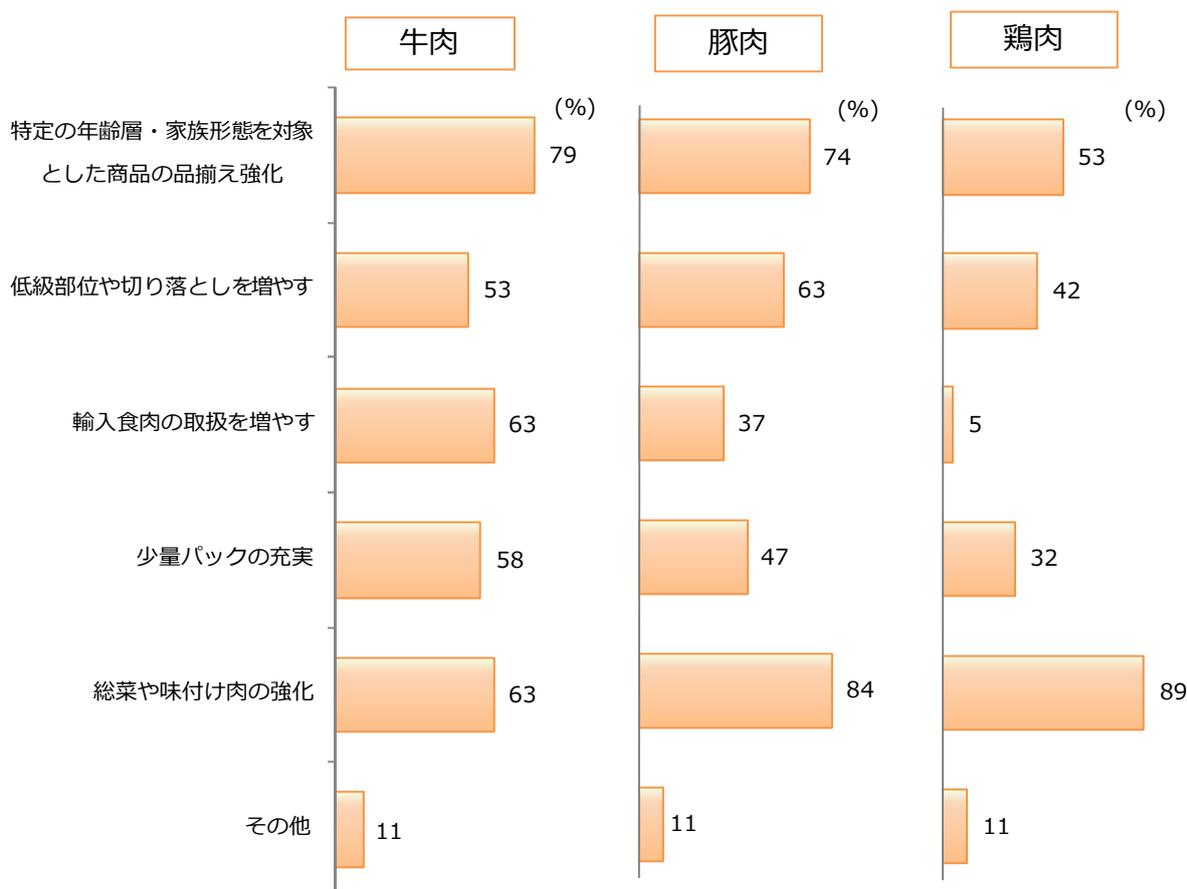


量販店

～豚肉・鶏肉は「総菜や味付け肉の強化」が1位～

- 量販店における販売拡大に向けた対応については、**牛肉**では**1位**が「**特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化**」、2位が「輸入食肉の取扱いを増やす」および「総菜や味付け肉の強化」となった。
- 豚肉**では**1位**が「**総菜や味付け肉の強化**」、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「低級部位や切り落としを増やす」となった。
- 鶏肉**では**1位**が「**総菜や味付け肉の強化**」、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「低級部位や切り落としを増やす」となった。
- 豚肉および鶏肉において、「総菜や味付け肉の強化」という回答が多く、中食総菜市場の拡大を背景に、時短・簡便商品の取扱いを増やしていることがうかがえる。
- 販売拡大に向けた具体的な対応として「簡便商材への取り組みを継続する中で、味、質にこだわった商品化を進める」、「高齢者をターゲットとした少量パックの取扱いを増やす」、「販売価格の一部を見直し、ファミリー層の取り込みを図る」などが挙げられた。

販売拡大に向けた対応（量販店）



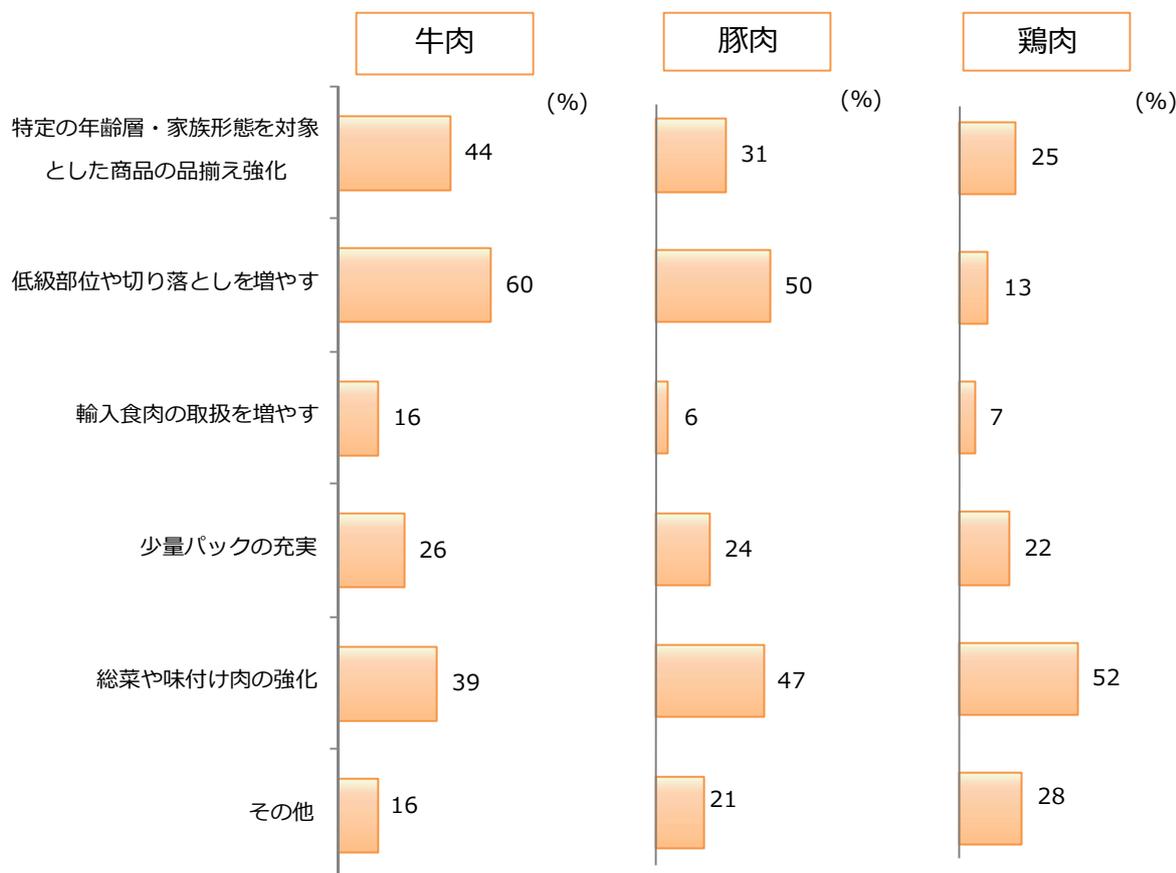
注：複数回答。

食肉専門店

～牛肉・豚肉は「低級部位や切り落としを増やす」が1位～

- 食肉専門店における販売拡大に向けた対応については、**牛肉**では**1位が「低級部位や切り落としを増やす」**、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「総菜や味付け肉の強化」となった。特に、食肉専門店では和牛が主力商品であることから、消費者が求めやすい低価格の部位や切り落としの取り扱いを引き続き強化していることがうかがえる。
- 豚肉**では**1位が「低級部位や切り落としを増やす」**、2位が「総菜や味付け肉の強化」、3位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」となった。
- 鶏肉**では**1位が「総菜や味付け肉の強化」**、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「少量パックの充実」となった。
- 販売拡大に向けた具体的な対応として「精肉よりも総菜商品を充実させ、アイテムを増やす」、「豚肉を活用し、餃子や豚まんなどの中華総菜のアイテムを増やしていきたい」、「最近の消費者は脂肪が多い牛肉を好まないのので、モモやヒレ、ハラミなど脂肪の少ない部位を割安感のあるセット販売にして消費を喚起していく」などが挙げられた。

販売拡大に向けた対応（食肉専門店）

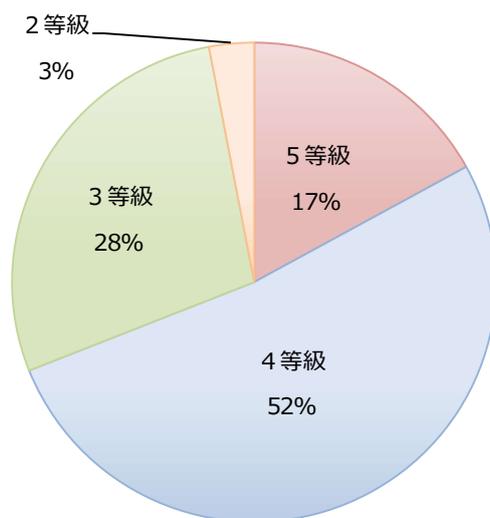


注：複数回答。

量販店 ～ 4等級が半数を占める ～

- 2019年度下半期の量販店における和牛の等級別取扱割合（実績）については、**4等級が52%と最も多く、次いで、3等級が28%、5等級が17%、2等級が3%**となった。
- 主な部位として、4等級は「かた」および「もも」が最も多かった。
- このことから、量販店では比較的低価格な等級、部位を中心に取り扱っていることがうかがえる。

和牛の等級別取扱割合（量販店）

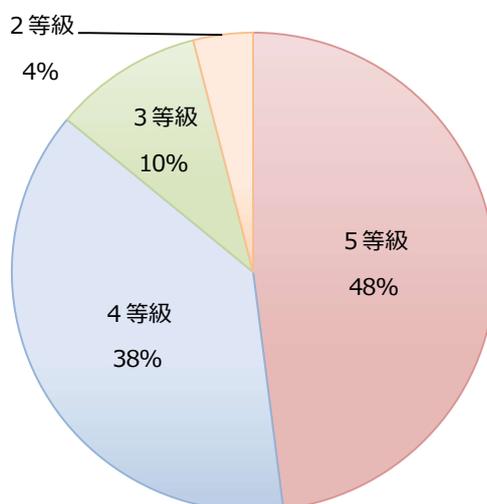


注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

食肉専門店 ～ 5等級が約半数を占める ～

- 2019年度下半期の食肉専門店における和牛の等級別取扱割合（実績）については、**5等級が48%と最も多く、次いで、4等級が38%、3等級が10%、2等級が4%**となった。
- 主な部位として、5等級は「かたロース」、4および3等級は「もも」が最も多かった。

和牛の等級別取扱割合（食肉専門店）



注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

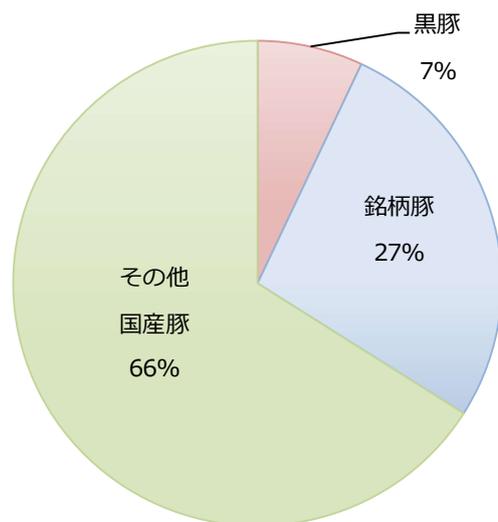
量販店

～銘柄豚は約3割、その他国産豚は6割強～

○2019年度下半期の量販店における国産豚肉の種類別取扱割合（実績）については、**その他国産豚肉が66%と最も多く、次いで、銘柄豚が27%、黒豚が7%**となった。

注：「その他国産豚」は、黒豚、銘柄豚以外の国産豚。「銘柄豚」には黒豚を含まない。

国産豚肉の種類別取扱割合（量販店）



注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

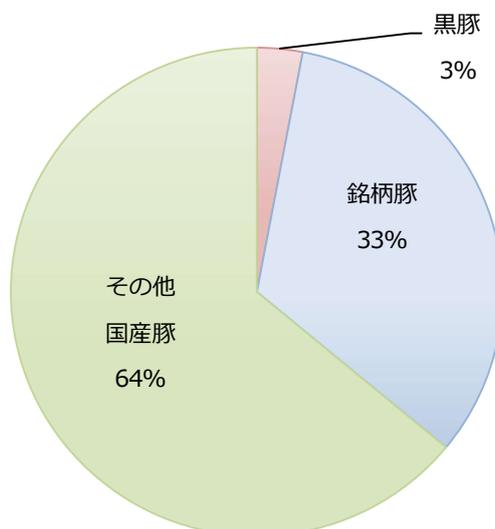
食肉専門店

～種類別取り扱い割合は量販店とほぼ同様～

○2019年度下半期の食肉専門店における国産豚肉の種類別取扱割合（実績）については、**その他国産豚肉が64%と最も多く、次いで、銘柄豚が33%、黒豚が3%**となった。

注：「その他国産豚」は、黒豚、銘柄豚以外の国産豚。「銘柄豚」には黒豚を含まない。

国産豚肉の種類別取扱割合（食肉専門店）



注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

量販店

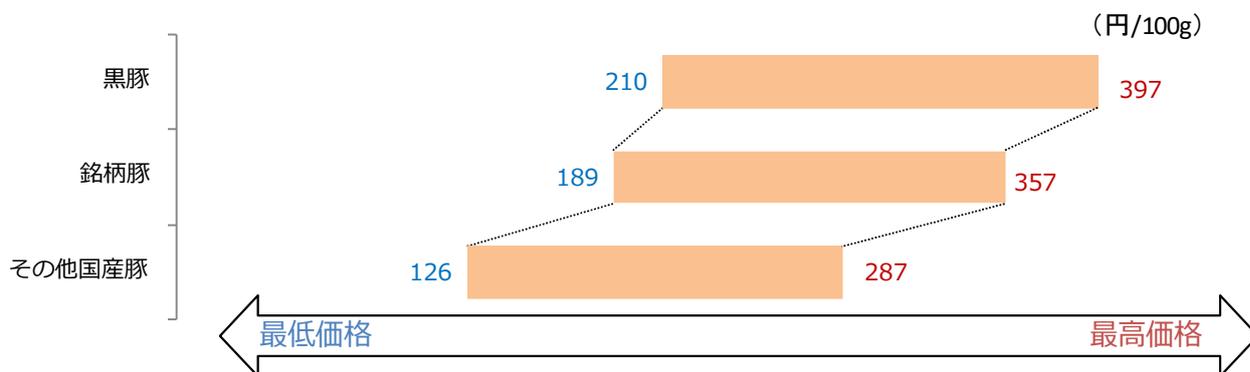
～その他国産豚が126～287円、銘柄豚が189～357円、黒豚が210～397円～

- 2019年度下半期の販売価格帯（100g当たり）については、**黒豚が210～397円、銘柄豚が189～357円、その他国産豚が126～287円**となっている。販売価格帯は黒豚が最も高く、次いで、銘柄豚、その他国産豚の順となっている。
- 種類別の価格傾向として、銘柄豚はその他国産豚よりも2割程度高い価格帯となっており、黒豚はその他国産豚よりも5割程度高い価格帯となっている。

注1: 販売価格帯の下値は最低価格、上値は最高価格。各者の平均価格（算術平均）である。

2: 「その他国産豚」は、黒豚、銘柄豚以外の国産豚。「銘柄豚」には黒豚を含まない。

国産豚肉の種類別販売価格帯（量販店）



食肉専門店

～その他国産豚が135～246円、銘柄豚が174～299円、黒豚が230～354円～

- 2019年度下半期の販売価格帯（100g当たり）については、**黒豚が230～354円、銘柄豚が174～299円、その他国産豚（黒豚および銘柄豚以外）が135～246円**となっている。食肉専門店においても量販店と同様に販売価格帯は黒豚が最も高く、次いで、銘柄豚、その他国産豚の順となっている。

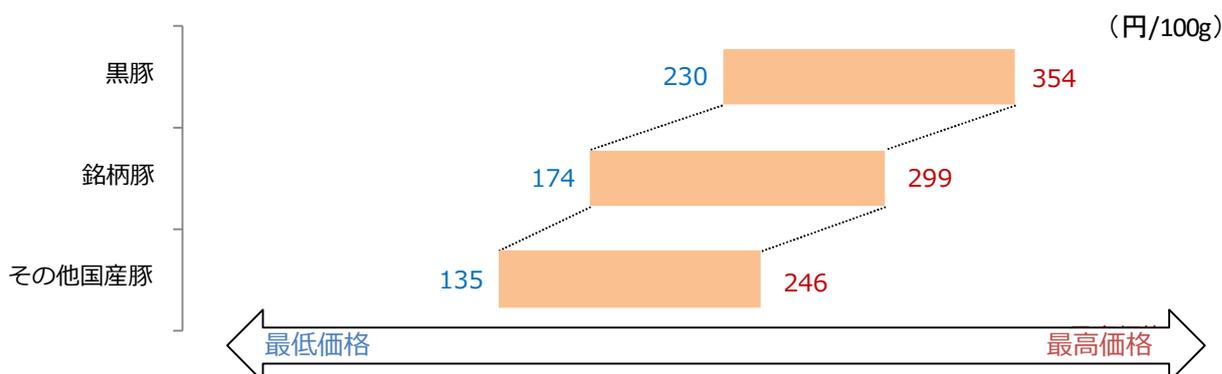
- 種類別の価格傾向として、銘柄豚はその他国産豚よりも3割程度高い価格帯となっており、黒豚はその他国産豚よりも5程度割高い価格帯となっている。

- 販売価格帯の幅を見ると、いずれの価格帯の幅も量販店に比べて小さいことから、量販店に比べて特売の実施回数が少ないことが考えられる。

注1: 販売価格帯の下値は最低価格、上値は最高価格。各者の平均価格（算術平均）である。

2: 「その他国産豚」は、黒豚、銘柄豚以外の国産豚。「銘柄豚」には黒豚を含まない。

国産豚肉の種類別販売価格帯（食肉専門店）



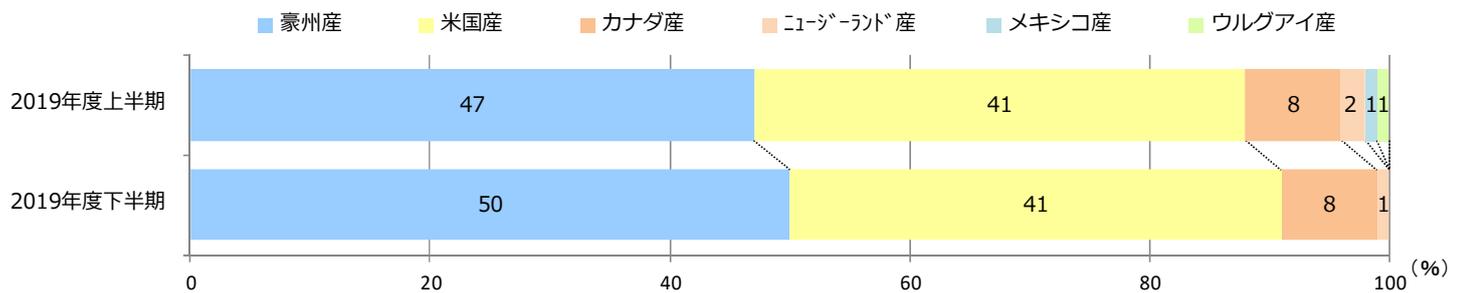
輸入牛肉の取扱割合

～豪州産が最も多い～

○2019年度下半期の量販店における輸入牛肉の取扱割合は「**豪州産**」が**50%（2019年度上半期調査47%）**と最も多く、次いで、「**米国産**」が**41%（同41%）**、「**カナダ産**」が8%、（同8%）、以下、「**ニュージーランド産**」が1%（同2%）となった。

○2019年度上半期の取扱割合と比べると、「**ニュージーランド産**」、「**メキシコ産**」および「**ウルグアイ産**」減少した一方、「**豪州産**」が増加した。

輸入牛肉の取扱割合（量販店）



注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

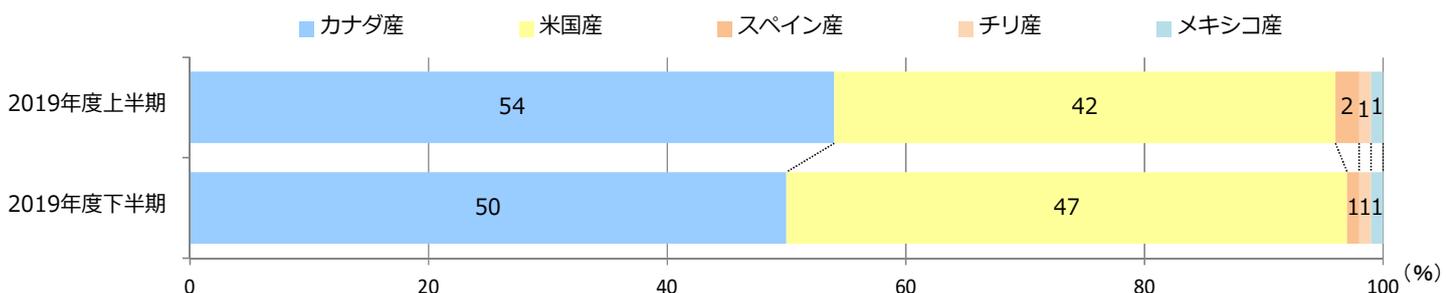
輸入豚肉の取扱割合

～カナダ産が最も多い～

○2019年度下半期の量販店における輸入豚肉の取扱割合は「**カナダ産**」が**50%（2019年度上半期調査54%）**と最も多く、次いで、「**米国産**」が**47%（同42%）**、以下、「**スペイン産**」が1%（同2%）、「**チリ産**」が1%（同1%）、「**メキシコ産**」が1%（同1%）であった。

○2019年度上半期の取扱割合と比べると、「**カナダ産**」および「**スペイン産**」が減少した一方、「**米国産**」が増加した。

輸入豚肉の取扱割合（量販店）



注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。